課題解決型学習を中心とした男女共習の授業実践

－種目「アルティメット」をみんなで楽しむために－

吉川（よしかわ）　智貴（ともき）・白石（しらいし）　大悟（だいご）

１．はじめに

今回の学習指導要領の改訂の背景として、「情報化やグローバル化など急激な社会的変化の中でも、未来の創り手となるために必要な資質・能力を確実に備えることのできる学校教育の実現」が挙げられている。今回の指導要領の改訂に度々登場するこの「資質・能力」を学校として、また、教科としてどのように育成するのか、そもそも「情報化やグローバル化など急激な社会的変化の中で、未来の創り手」に必要な資質・能力、今回の教育研究会のテーマであるコンピテンシーはなにか。そういったことを教科で検討を深める過程で、本校保健体育科のこれまでの取り組みについて整理を行った。

本校の保健体育科では、長年、教師主導の一斉型授業ではなく、生徒主体の課題解決的な学習を中心とした授業を展開してきている。少なくとも昭和 53 年には、教師主導の一斉型授業からの脱却を図っていることがこれまでの記録より確認できた。昭和 53 年とは、昭和 52 年に学習指導要領が改定され、「生涯スポーツ」や「運動に親しむ」という言葉が使われ、体育科教育が大きく転換された頃である。そして、現行の学習指導要領にその考え方が引き継がれていることと同じく、本校の保健体育科でも長年特に大切にされてきた考え方であり、授業としても対話を中心とした課題解決型の学習を展開している。それはつまり、今回の学習指導要領改訂の一つのポイントでもある「主体的･対話的な深い学び」を本校ではすでに 40 年近く行ってきたことになる。そのことをふまえ、これまで本校が大切にしてきた授業形態や活動を通して育てられるであろう資質や能力を整理し、それを本校の保健体育科で育てたいコンピテンシーとして経済産業省が提唱している「社会人基礎力」を用いて設定することとした。

後に学習指導案を記載するが、本校の体育の授業は多くの場合、生徒がミーティングを行い、活動内容を決定し、自分たちの課題を解決するために活動を進めていく。自分たちで①課題を発見し、②課題を解決する方法を考え、③計画的に実行し、④試合などを通して、成果と次の課題を確認する。こういった活動を通して､社会人基礎力の３つの要素である“シンキング”（①②③）･“アクション”（③④）･“チームワーク”（ミーティングを行うこと）が身に着くと考える。

また、今回改訂された学習指導要領においても、「課題を発見し、合理的、計画的な解決に向けた学習過程を通して」ということが強調して書かれており、ミーティングを中心とした学習過程は今回の指導要領の目指している内容とも合致している。

加えて、本校の高校保健体育科では、年度初めの体育授業のオリエンテーションで、授業を受けるうえで次の 2 つの目標を持ってほしいと伝えている。

Ⓐ スポーツを楽しむこと・スポーツの楽しみ方を知ること
Ⓑ スポーツを通して、色々な力を身に着けること

Ⓐはまさに生涯スポーツに向けて、体育授業に一番求められているものであると考える。Ⓑは先に述べた社会人基礎力のことである。以上の 2 点を教員・生徒ともに授業を行うにあたって、また授業を受けるにあたっての目標としている。話は少しそれるが、学習指導要領の改訂に伴い、いくつかの研究会や研修に参加したが、その授業の多くが「主体的」や「対話」･「評価」、「資質・能力」ばかりがフォーカスされ、体育科の根本である「スポーツを楽しむ」という観点が軽視されているように感じる。体育科の教員として、生徒にどう活動させ、なにかに気付くように仕掛け、「自分にとってのスポーツの楽しみ方」を学ばせるかが最重要命題であると考える。

以上のことに加え、今回の学習指導要領の改訂の中で科目体育としてもう一つ注目すべき点に「原則として男女共習で学習を行うこと」という点が挙げられる。今回の授業実践では、男女共習を背景に、スポーツをみんなで楽しむとはどういうことかを考え、話し合い、教え合い、学び合いを通して、多様な観点から種

目「アルティメット」を楽しむこと、そして、楽しむことを通して社会人基礎力の向上を目指した。

２．授業実践の内容

（１）授業の到達目標

以下の３点を主な目標とし、生徒に示した。

・性差、技能の習得差に関係なく、全員が“楽しく”アルティメットのゲームができるようになる。
・アルティメットの“楽しさ”が何なのかを一人一人が考え、実践する。
・将来のスポーツライフの選択肢を増やす。

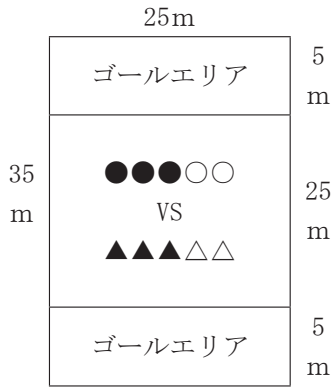
これらの目標を達成することで、性差に関係なく、他者と一緒に身体を動かす楽しさを実感させることを指導目標とした。

（２）授業の内容

基本的な運動技術となるパス、キャッチ、戦術については一年次の男女別の授業内で習得済みである。二年次においては、一年次に実践した練習内容を派生させ、チーム内で必要な練習を考案させることに重点を置いた。そのため、チーム内でのミーティングの時間を重視し、練習前、試合の合間、試合後と回数および時間も長くとり、チーム内での話し合いの時間を大切にした。

試合時の主なルールは以下の通りである。

・コート内は５人の選手が入り、男女どちらも複数名がコート内にいること（右図参照）
・パスが失敗したら攻守が入れ替わる（ランタイム）
・ディスク保持者は動けない
・ディスク保持者につけるディフェンスは１人のみ
・ゴールエリア内でディスクをキャッチすれば得点
  ▸ 女子が得点に関わった場合は２点
・ゴールする度に攻撃の方向が入れ替わる
・５分のランタイムとする



（３）授業計画

全 10 時間の授業時間を下記の表のように展開した。

年次	時限	学習課題	学習活動	評価		
				知（a）	思（b）	主（c）
第二学年（男女共習）	１時限	男女共習で行う意義 ルールや技術の確認	・ルール確認 （女子が得点もしくはアシストの場合２点とする特別ルール）	① ③　⑤	②③ ④⑤	①　③ ④⑤⑥
	２時限	チームメイトの能力に応じた作戦の立案	・全員を巻き込んだプレイをするための練習	①② ③　⑤	①②③ ④⑤	①　③ ④⑤⑥
	３時限	簡易ゲーム	・ルールの再確認と動きの確認	①② ③④⑤	①②③ ④⑤	①②③ ④⑤⑥
	４・５時限	男女混成チームでの総当たり		①② ③④⑤	①②③ ④⑤	①②③ ④⑤⑥
	６時限	クラスを混在させた新たなチーム編成		①② ③④⑤	①②③ ④⑤	①②③ ④⑤⑥

	7・8 時限	新たな男女混成チームでの 総当たり		①② ③④⑤	①②③ ④⑤	①②③ ④⑤⑥
	9・10 時限	男女別総当たり戦		①② ③④⑤	①②③ ④⑤	①②③ ④⑤⑥

（4）生徒観・指導観

身体を動かすことが好きな生徒が多く、性別に関係なく、自身の意見を述べることができる生徒が非常に多い学年でもある。何事にも前向きにとらえることができ、試合の勝敗だけでなく、試合の質にもこだわって戦術を考えることができる。

生徒の主体性を重んじることで男女共習授業を深化させたいという思いから、教師が指示をだすのではなく、教師は戦術に関しての指示は積極的に行わず、適宜支援を行った。

（5）評価の観点

評価の観点は以下の表のとおりである。

観点	a: 知識・技能	b: 思考・判断・表現	c: 主体的に学習に取り組む態度
観点の趣旨	①ゲーム進行に必要なルールを理解している。 ②課題解決のための練習方法を理解している。 ③ディスクをキャッチし、自身が意図したところにパスができる。 ④空間に移動してパスを受けたり、パスを出したりすることができる。 ⑤得点のためのフォーメーションやセットプレイなど、チーム内の役割に応じた動きができる。	①チーム内での役割に関する成果や改善すべきポイントについて自己および仲間の活動を振り返ることができる。 ②個々人の技能に応じたチームとしての戦略を考え、実践することができる。 ③課題解決のための練習方法の選択、考案について自己の考えを伝えることができる。 ④ミーティング場面で合意形成するための関わり方を見つけ、伝えることができる。 ⑤体力や技能の習熟度、性差等の違いに配慮して、運動を楽しむための活動ができる。	①準備や片付けなどを含め、積極的に取り組もうとしている。 ②対戦相手やチームメイトを尊重するフェアプレイを大切にしようとしている。 ③チームでの役割を理解し、自己の責任を果たそうとしている。 ④周囲の安全に注意し、安全を確保した活動をしようとしている。 ⑤個々人の違いに応じた課題や挑戦、修正等を大切にしようとしている。 ⑥仲間とともに楽しく活動に参加している。
上に示す観点に基づいて、各観点で評価し、学期末に観点別学習状況の評価（A、B、C の 3 段階）にまとめます。また、学年末に観点別学習状況の評価（A、B、C の 3 段階）及び評定（1 ～ 5 の 5 段階）にまとめます。			

（6）指導計画の詳細

今回は 5 時限目の授業の様子を教育研究会として発表した。以下に当時の学習指導案を示す。

時間	学習活動	学習内容	指導上の留意点	評価
導入 5 分	○集合整列・点呼 （チームごと） ○本時の説明 ○体操	本時の流れの確認		a: b: c: ①④
展開① 10 分	○チームでのミーティング - 戦術について - 練習内容について ○パス練習 - チーム内で考えた練習 ○チーム内の戦術練習 - チーム内で考えた練習	ホワイトボードを用いて本時の作戦の立案および練習方法の考案 対面パスや円形でのパス、走りながらのパス回しなど、チームで考案したパス練習 パス回しだけではなく、戦術の確認	チーム内で活発な話し合いがなされるように、声掛けを行う 一緒に練習に参加したり、声掛けにより、新たな気づきを生徒が持てるような言動を行う。	a: ①②③④⑤ b: ①②③④ c: ③④⑤⑥
展開② 25 分	○ゲーム 3 本 全 4 コートの中で 3 チーム総当たり（5 分）	ゲームの中で、改善すべき点の確認 ゲームの合間でミーティングを行う ゲーム内で課題を見つけ、その課題を解決するための方法を話し合いの中で見つけ出す	ゲームの進行を行いつつ、各チームの動きを確認する	a: ①②③④⑤ b: ①②③④⑤ c: ②③④⑤⑥
終末 5 分	○チームでのミーティング - 上手くいった点 - 次回への課題 ○集合・挨拶	次回につながるミーティングを行う 個人、チームの課題は何か、それを解決するための練習方法を考える	ケガの有無の確認	a: ①② b: ①③④ c: ①③⑤⑥

3．生徒の反応

練習前に活動ノートを配付し、今日のチームとしての目標、練習計画、作戦について考えさせた。ここではその一部を抜粋する（図 1、図 2）。練習内容は一年次に教師から指示をして実践したものが多く、自分たちで練習内容を考えるまでには至らなかったが、チームの戦術として何が足りないのか、それを補うためにはどの様にすれば良いのかを話し合う姿がよく確認できた。また、性差に関係なく、技術を教え合う姿が随所にみられ、性別や運動能力の差に関係なく、チームで、授業全体として運動を楽しむ姿勢が見て取れた。これは教師が望んでいた姿であり、他種目や他授業の中でもこの様な姿が見られることが望ましい。

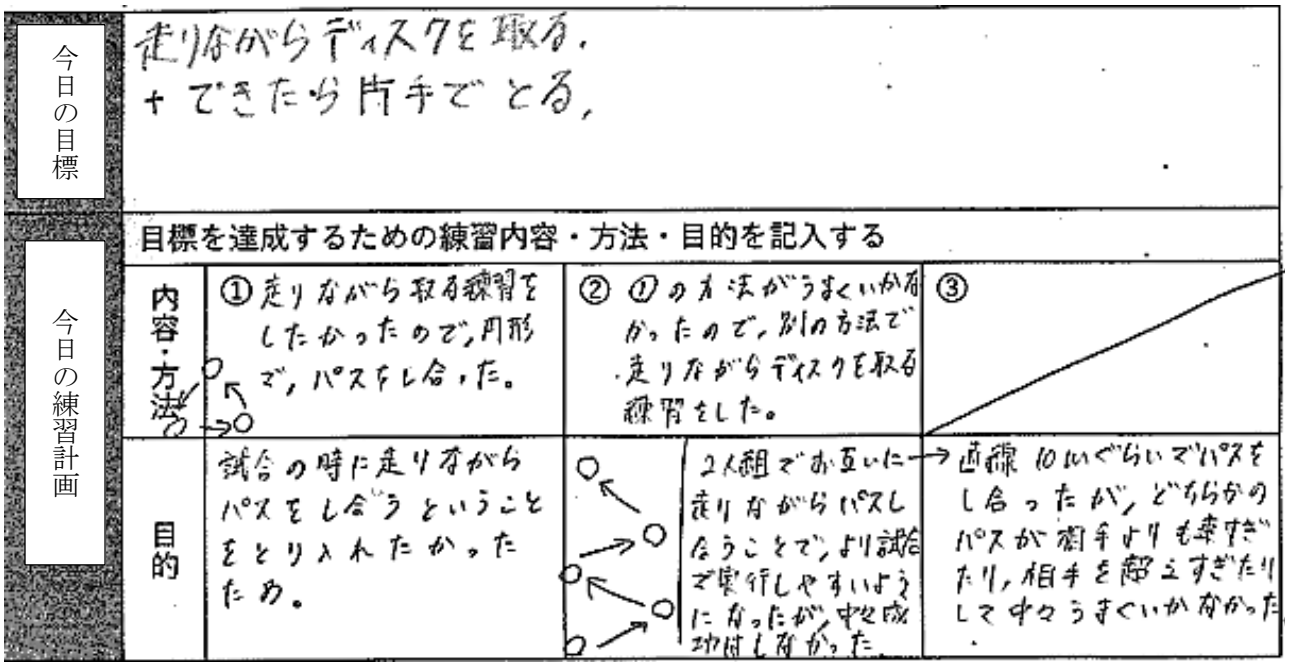


図１　活動ノート（今日の目標・練習計画）の抜粋

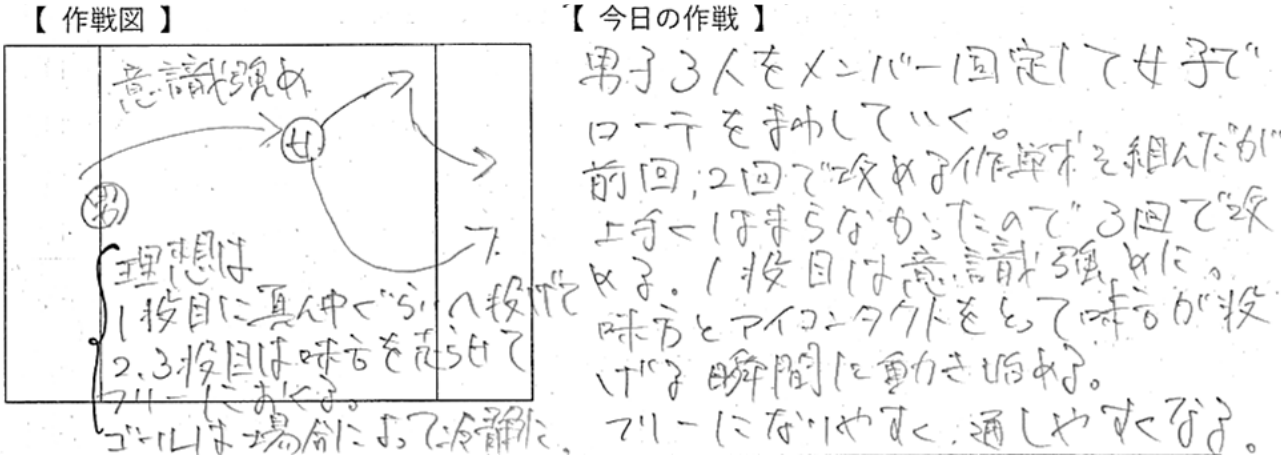


図２　活動ノート（今日の作戦）の抜粋

毎授業後には自己評価とともに、振り返りのコメントを記入させた（図 3）。自己の振り返りとともにチームの振り返りができており、これらを元に次回の練習内容や戦術を考案していた。これらの授業ノートを確認し、コメントをすることで生徒と教師のやり取りを行った。生徒同士の話し合いを重視したため、授業内での教師からの指示は極力少なくしたが、前述の通り、練習内容に変化が見られなかった点については今後改善の余地があると考えている。

アルティメットは接触が禁止されている。また、レディネスの差も少ないと判断し、男女共習での授業に取り入れたが、基本的なキャッチについては性差を問わず得手不得手がある。一年次の基本練習時に技術習得を徹底させておくことが重要である。

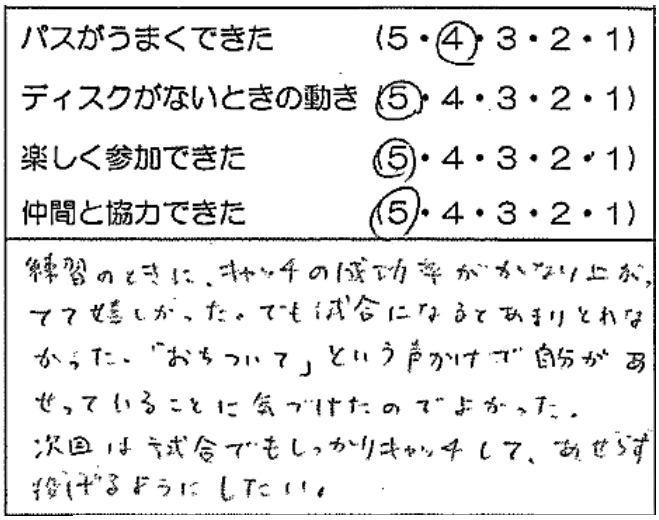


図３　活動ノート（毎授業後の自己評価）

また、単元終了時には図 4 に記載の項目について 4 段階で自己評価を行わせた。回収した 130 名の自己評価の平均点をグラフに示す（図 4）。全体的に高い値を示した。特に「1. 楽しく授業に参加できたか」「5. 授業を通してアルティメットの楽しさを学ぶことができたか」については 9 割の生徒が 4 を回答しており、楽しく授業に参加していたことが分かる。「3. 積極的にコミュニケーションをとることができたか」についてはグループの差が出たのではないかと考えている。教員目線では、どのグループも活発に会話をして授業に臨んでおり、高い評価をしていたが、生徒目線ではさらに高いレベルでのコミュニケーションが取れたのではないかと考えている様である。

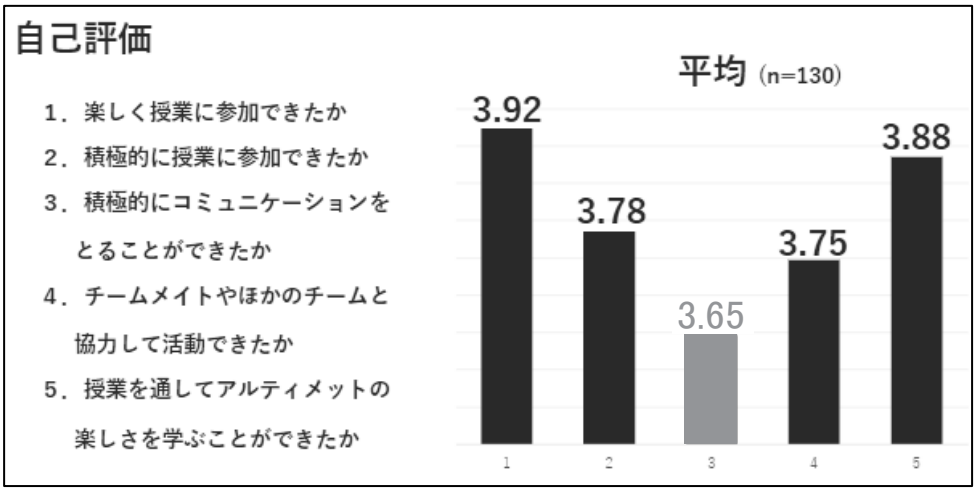


図４　単元終了後の自己評価（平均）

４．達成できたこと

男女共習を通して性別に関わらず、一人ひとりの技能の習熟度の違いに焦点をあててチーム内でのミーティングも活発化し、チームで勝つためにはどの様にすれば良いのか、全員でアルティメットという競技を楽しもうという授業目標は達成できた。また、ある生徒は体力面、ある生徒は丁寧なパス回しが得意など、個々人の得意、不得意なプレイや、お互いの違いや良さへの気付きがあったことで、自身の可能性や価値観の広がりに繋がった。

単元の後半は男女別で試合を行ったがそこでも共習の成果が表れた。男子は昨年まではロングパスが 1 回通れば得点、通らなければそれまでという様なプレイが散見されたが、細かいパスをつなぐという戦略の幅が広がった。女子では運動量が増加したり、声掛けが増えたりと、共習を行ったことによる相乗効果も随所に見られた。

何より、大多数の生徒が話し合い、教え合い、学び合いながら、楽しくスポーツに取り組むことができた。スポーツを「楽しむ」ということは様々な観点がある。全員が同じ観点ではないが、アルティメットという種目を通してスポーツを楽しめた生徒が多くいたことから、本単元の授業目標は達成できたと自負している。

５．今後の課題

男女共習で行うことで、チーム内での役割、ポジションが固定されてしまうといったことも見られた。チームの戦略としては良いのだが、個人で考えるとプレイの幅が狭くなるなど、自由度が制限されてしまったとも考えられる。一方で男女別習では全員が流動的に動いていたので、運動量という観点では別習の方がよかったのかもしれない。ポジションが固定されたことに関しては、今回の女子が得点に絡むと 2 点という特別ルールが影響していたとも考えられる。また、共生を謳って授業を展開したにも関わらず、女子を 2 点にしたことは、授業者 2 人でも議論を交わしたところだった。生徒にも途中でルール変更をするか確認したが、8 割ほどの生徒からは女子を 2 点にしてほしいという声があったので、そのままのルールで行ったが、今後はルールや約束事自体を生徒に設定させることも有効かもしれない。

男女共習の授業を行うことで、様々な相乗効果も得られることがアルティメットの授業を行うことで見出せた。本校保健体育科としてこれまで大切にしてきた「生徒主体の課題解決的な学習」の幅を広げる手段としても男女共習は有効であることが示唆された。今後、他種目においても共習で行うことも視野に入れて授業を計画していきたい。